



横幹連合の創立前夜

鈴木 久敏*

Prehistory and Episodes of TraFST

Hisatoshi SUZUKI*

Abstract– This document describes the prehistory and some episodes before Transdisciplinary Federation of Science and Technology (TraFST) was established from a viewpoint of a person who concerned deeply in those days.

Keywords– society union, prehistory of TraFST, concept of TraFAST, Transdisciplinary Federation of Science and Technology

1. はじめに

横幹連合は今年創立 10 周年を迎えた。創立及び創立後の歴史の詳細は、10 年史編纂委員会が刊行する「横幹連合 10 年の歩み」に譲るとして、横幹連合とその前身となるシステム関連学会連合（準備）懇談会、その後継である横断型科学技術研究団体連合（設立）準備委員会に深く関わった者として、正史である「横幹連合 10 年の歩み」には掲載されないであろう創立前夜の頃のいくつかのエピソードを紹介したい。なお、以下文中で固有名詞の敬称は略して記載することをお許しいただきたい。

2. システム関連学会連合懇談会

2000 年 4 月から私は 2 年任期で OR 学会¹の無任所理事を務めていた。任期 2 年目の 2001 年 6 月 28 日に OR 学会事務局から「7 月 18 日に第二回システム関連学会連合懇談会があるので、OR 学会を代表して無任所理事が出て欲しい」との会長の意向をメールで受け取った。メールの添付情報等によれば、木村英紀（当時、SICE² 会長、東京大学教授）から、元同僚である伏見正則（当時、元 OR 学会副会長、南山大学教授、前東京大学教授）に対して、「システム関連学会連合懇談会に OR 学会も参加して欲しい」との依頼があり、伏見が長谷川利治（当時、OR 学会会長、南山大学教授、前京都大学教授）に、「伝統的な“縦型”の学会に対して、“横型”の学会が力を合

わせて、発言力を増そうというもののだ。OR 学会からも誰か役員を派遣して情報を収集した方が良い」と進言があり、その結果「無任所理事が様子を見て来い」という先の指示に繋がったようである。OR 学会として、まだシステム関連学会連合懇談会がどのようなものであるのか、どう対応すべきか、まったく何も考えていない状態であった。後日、会長の長谷川に OR 学会がとるべきスタンスを直接尋ねたところ、SICE にも関係していた長谷川は、「SICE はアクティブな学会なので、話がトントンと進んでしまうかも知れない。話が変な方向に行かないように、また OR 学会が話に乗り遅れないように、まずはどんな話し合いなのか様子を見てきて欲しい」ということであった。OR 学会としては、是々非々かつ様子見のスタンスであった。

7 月 18 日に、当時、東大赤門の隣にあった学生会館分館 7 号室で第二回システム関連学会連合懇談会が開催された（ちなみに、第一回は 4 月に SICE、ISCIE³、ロボット学会⁴の呼び掛けで約 10 学会が集まって議論したようである）。第二回懇談会の出席者は、木村英紀（座長、SICE）、鈴木久敏（OR 学会*）、館暲（VR 学会^{5*}）、田中穂積（人工知能学会*）、千原國宏（ISCIE）、土井美和子（HI 学会⁶）、藤本英雄（スケジューリング学会）、古橋武（ファジイ学会⁷）、山崎憲（シミュレーション学会^{8*}）、齋藤保孝（SICE）、阿部直人（SICE、記録係）の 11 人 9 学会であった（* は新規参加）。当日は欠席で

1. 正式名は日本オペレーションズ・リサーチ学会
2. 正式名は計測自動制御学会
3. 正式名はシステム制御情報学会
4. 正式名は日本ロボット学会
5. 正式名は日本バーチャルリアリティ学会
6. 正式名はヒューマンインターフェイス学会
7. 正式名は日本ファジイ学会
8. 正式名は日本シミュレーション学会

*筑波大学名誉教授 神奈川県横須賀市岩戸 5-19-10

*Professor Emeritus, University of Tsukuba, 5-19-10 Iwato, Yokosuka, Kanagawa

Received: 30 July 2013, 1 August 2013

あったが、第一回には岡田真人(神経回路学会⁹)、木下源一郎(ロボット学会)、津宏治(リモセン学会¹⁰)が参加していたようである。行動計量学会¹¹が次回から参加との紹介があったので、この時点で計13学会が何らかの関心を持って参集していた。出席者の顔ぶれを今見直すと、その後、横幹連合の役員として活躍される方々の名前が既に垣間見える。当日の議事録[1]を見直すと、学会により連合への期待は様々で、多くの学会がまだ様子見の段階であり、「各学会の独自性を担保した形の緩い協力関係なら“連合”も考えられ得る」という雰囲気が出ている。それでも(1)システム技術の重要性を強調するアピールを各方面に関係各学協会の会長名で発する(原案をSICE, ISCIE, ロボット学会で作成)、(2)システム関連学会連合のホームページを作りそれに関連学会のホームページへのリンクを張る(3)システム関連学あるいは横断型学問のカリキュラムと教科書の策定計画を作る、の3点が合意された。この時点ですでに「横断型」という概念が共有されていたことになる。

議論の中で多くの学会から「我々はソフト中心の学会で、モノ、ハード中心の学会とは異なる」という発言がなされたが、OR学会や日本経営工学会を足場に活動してきた私個人からすると、言葉には出さなかったが「そうは言ってもここに集まった学会のほとんどは工学系。ORと比べればハードだね」というのが実感であった。OR学会としては「発言力を強化するため学会の枠を超えて連携することには賛成、ただ、これまでFMES¹²に加盟して活動してきているので、信義上、FMESを抜かなければシステム関連学会連合に参加できないということでは困る。FMESを含めたより広い連携を模索するのであれば検討の余地がある。それまではオブザーバの形で議論に加わる」旨の立場を表明した。第一回懇談会から参加している「工学系」の学会にとっては、「なんと後ろ向きの発言」と映ったに違いない。

一方、第二回懇談会の合意(1)を踏まえて、賛同する学会の会長連名で総合科学技術会議に対して「システム関連技術の振興を図るべき」という提言を行うことになり、SICE企画委員会がまとめた原案を元に、木下源一郎、木村英紀、千原國宏が、提言(原案)[2]と提言の背景を記した「提言の背景説明」の2つの文書を取りまとめ、9月30日に各学会にメールで送付し、提言への賛否と意見を求めた。この時点で既に提言タイトルが「横断型研究開発推進の重要性について」となっており、国際的な技術開発のトレンドが垂直的な深化から横断型の融合へ移動しているとの問題認識の下、技術開発の新

しい戦略的な軸として横断的融合を設定するために(1)現在の科学技術政策の立案および実施、評価にシステムアプローチの専門家を参画させる(2)大学等への研究費配分を垂直型と横断型の2次元構造とする(3)システムアプローチの戦略的な推進とそのアカデミックな研究を行う「新システム総合研究センター」(仮称)を設置する、の3つの具体的提案がなされている。この提言(原案)に対して、いくつかの学会や総合科学技術会議筋から意見等が寄せられ、それらの修正を行い、12月26日に賛同した12学会の会長連名で総合科学技術会議桑原洋議員に提言[3]を提出した。ちなみに、提言に賛同した学会は、SICE, ISCIE, 精密工学会, ロボット学会, ファジィ学会, HI学会, VR学会, 人工知能学会, スケジューリング学会, 植物工場学会¹³, OR学会, リモセン学会であった。

翌2002年になると、1月8日に日刊工業新聞[4]が「横断型の研究推進を12学会総合科学技術会議に提言」とする4段見出しの記事を掲載し、「横断型思考に基づく科学技術研究推進の重要性をアピールするもの」と評価してくれた。2月10日になると、木村座長の働きかけもあり、一般紙の毎日新聞が「横断型研究 古い学术界を変える時だ」とする社説[5]を掲載し、12学会提言を支持してくれた。また、年明けと同時に、木村座長の下で、提言に謳った項目に関連して、総合科学技術会議筋、文部科学省、経済産業省との打合せやヒアリングが進行し、科研費分科細目構造の見直し、新システム総合研究センター(仮称)の設置、政策提言プログラムへの応募等について、その可能性の模索が進んだ。12学会の行動が波紋を呼び始めた。

3. 文系への拡大

毎日新聞が社説を掲げる少し前、2002年1月末頃、木村座長から私に電話で、「政府筋との折衝で文理融合をもっと強力に謳う必要がある。については、懇談会メンバーを文系に拡大したい。OR学会は文系への繋がりもあるので、関連学会に呼びかけて欲しい」との依頼があった。私は木村座長へ、「OR学会が参加を呼び掛けるとなると、FMES関連学会が中心となり、それらが懇談会に参加すると、ちょうどOR学会が分野的に懇談会の中心になり、これまで準備してきた“工学系”の学会から反発を受けないか」と不安を表明したが、木村座長は「それでも文系に広げたい」との返事であった。木村座長の要請を受け、OR学会会長の長谷川とも意見調整をして、FMES関連学会に対してOR学会名で、システム関連学会連合懇談会の動き、12学会提言、それに対する総合科学技術会議筋、文部科学省筋やマスコミの反応

9. 正式名は日本神経回路学会

10. 正式名は日本リモートセンシング学会

11. 正式名は日本行動計量学会

12. 経営工学関連学会協議会: 日本経営工学会, 日本OR学会, 日本品質管理学会, 日本信頼性学会, 日本設備管理学会, 研究・技術計画学会, 経営情報学会, プロジェクトマネジメント学会, 日本開発工学会の協議会。持ち回りで毎年シンポジウムを開催

13. 正式名は日本植物工場学会

を文書にしたため、「関心があれば次回の懇談会に参加を」との勧誘文書を2月8日に送った。それと並行して、私自身の個人的な繋がりを元に、経営工学会¹⁴、QC学会¹⁵、信頼性学会¹⁶、経営情報学会、社会情報学会¹⁷、応用数理学会¹⁸、PM学会¹⁹、経営システム学会²⁰、統計学会²¹、応用統計学会など、いくつかの学会の有力者に対して、関係資料を付して同様の誘いを掛けた。OR学会の勧誘を各学会内で側面支援してもらうことを狙った。さらに、OR学会事務局を介して、2月12日に開催されたFMESシンポジウム実行委員会の席で関連資料を配布した。OR学会や私の勧誘に多くの学会から前向きの返事があり、その後、その多くが横幹連合に参画した。

こうして2月20日には第三回システム関連学会連合懇談会が開かれ、青島伸治(SICE)、阿部祐子(QC学会*)、新井民夫(精密工学会)、岩田和秀(人工知能学会)、太田敏澄(社会情報学会*)、岡田真人(神経回路学会)、岸本一男(応用数理学会*)、木下源一郎(ロボット学会)、木村英紀(SICE)、小坂満隆(SICE)、鈴木久敏(OR学会)、館嶂(VR学会)、千原國宏(ISCIE)、出口光一郎(SICE)、土井美和子(HI学会)、西川智登(経営システム学会*)、原辰次(SICE)、藤本英雄(スケジューリング学会)、古橋武(ファジィ学会)、本多敏(SICE)、山田善靖(経営情報学会*)、吉澤正(PM学会*)、六川修一(リモセン学会)の23名18学会が参加した(*は新規参加)。第三回懇談会では(1)新システム総合研究センター構想(2)JABEEへの学会連合としての取り組み(3)科研費配分の方法に関する改善試案(4)科学技術振興調整費・政策提言への応募(5)今後の活動、の5つが議論された[6]。上記(2)については疑問が出され結論に至らなかったが、他の案件に関しては各学会とも前向きであった。特に(5)に関しては(4)の政策提言が採択された際の受け皿として学会連合を立ち上げるべきで、懇談会を学会連合準備委員会に格上げすべきとの意見が出され、当日の参加学会で検討グループを組織し政策提言応募とリンクして議論を深めることになった。

第三回懇談会で、木村座長が「デザイン関係の学会にも参加して欲しい」との発言をされていたので、翌日、私は勤務先の同僚である原田昭(当時、デザイン学会²²会長、筑波大学教授)に声を掛け、参加の可能性を打診した。原田は、「こういう集まりが欲しかった。デザイン関係は科研費申請でも枠がなく困っていたので、

是非、参加したい」、「日本学術会議の人間と工学研究連絡会の4学会(人間工学会²³、感性工学会²⁴、安全工学会、生体医工学会²⁵)にも声を掛ける」と言ってくれた。学会連合がまた新たな方向へ発展する契機となった。上記を木村座長に報告する際に私はメールの件名に「横断型学会連合懇談会」と記したようである。木村の返信に「Re: 横断型学会連合懇談会」として残っている。誰が使い始めたかは不明だが、この頃から関係者の間で次第に「システム関連学会連合」ではなく、より広い「横断型学会連合」という意識が芽生えていたのかと思う。前記(4)の政策提言の取り纏めを任された出口光一郎(当時、SICE、東北大学教授)の3月12日のメールには、「横断型学会連合(旧:システム関連学会連合)」の文字が躍っている。この時期、多くの関係者が「横断型学会連合」という表現を使うようになっていた。その中で、出口が取り纏めた政策提言の応募書類[7]で、初めて「横断型科学技術」という言葉が使われたと思う。

2002年4月に入り、私のOR学会無任所理事の任期が終了したが、同学会研究普及担当理事の了解の下、引き続きOR学会を代表して懇談会に関わることになった。

4. 横断型科学技術研究団体連合準備委員会

第三回懇談会の合意(5)を受けて、システム関連学会連合懇談会を学会連合設立準備委員会に衣替えすることになった。5月初旬頃から会則修正の意見交換が行われ、木村座長は当初「横断型学術団体連合」(略称、団体連合)との会則骨子を用意したが、その後、政策提言の「横断型科学技術」を採って、5月14日の時点で一旦「横断型科学技術研究団体連合」に落ち着いた。

5月24日午後、東京ガーデンパレスホテル「羽衣の間」で第一回横断型科学技術研究団体連合設立準備委員会が開催され、連合の会則草案が審議された。集まった代表は、江尻(ロボット学会)、木村(SICE)、出口(SICE)、館(VR学会)、中山(社会・経済システム学会)、千原(ISCIE)、六川(リモセン学会)、岡田(OR学会)、太田(社会情報学会)、吉川(HI学会)、登坂(日本計算工学会)、金道(神経回路学会)、梅田(PM学会)、岩瀬(SICE)、金子(経営システム学会)、清水(感性工学会)、原田(デザイン学会)、河野(経営工学会)、板生(精密工学会)、飯塚(QC学会)、岸本(応用数理学会)、伊藤(日本学術会議、医用生体工学委員会)、小西(応用統計学会)、田辺(統計学会)、藤本(スケジューリング学会)、木下(ロボット学会)、向殿(信頼性学会)、山田(経営情報学会)、廣田(ファジィ学会)、古橋(ファジィ学会)、高山(植物工場学

14. 正式名は日本経営工学会
15. 正式名は日本品質管理学会
16. 正式名は日本信頼性学会
17. 当時は日本社会情報学会
18. 正式名は日本応用数理学会
19. 正式名はプロジェクトマネジメント学会
20. 正式名は日本経営システム学会
21. 正式名は日本統計学会
22. 正式名は日本デザイン学会

23. 正式名は日本人間工学会
24. 正式名は日本感性工学会
25. 正式名は日本生体医工会

会), 鈴木 (OR 学会), 眞溪 (SICE, 書記) の 33 人 27 学会であった。江尻正員の司会の下 (1) 準備状況の報告 (2) 会則の検討 (3) 政策提言プログラムの報告, (4) 準備委員会の委員長・副委員長の選任が審議された [8]。(2) については, 会則の不備だけでなく, 「横断型科学技術の定義が不明確」, 「連合を構成する意義は何か」というような, 今日でも横幹連合が抱える課題が指摘されている。それでも, 政策提言を中心に学会連合として纏まって行動することを合意し, 準備委員長として木村英紀 (SICE), 副委員長として木下源一郎 (ロボット学会), 千原國宏 (ISCIE) を選出した。設立準備委員会の下に WG を置き, 規約案の修正を検討することになった。

5 月 30 日に木村英紀他 4 名が総合科学技術会議の桑原洋議員を訪ね, 政策提言プログラム申請に関して助言をもらった際に, 「横断型というのは響きが悪い。基幹科学でどうか? 基幹科学は響きが良い」という助言を受けた。これを受けて, 木村は両者の折衷案として「横断型基幹科学」という言葉を思い付き, 「今後, 学会連合の正式名称にして行きたい」との提案メールを関係者に送っている。7 月 2 日の第二回準備委員会 WG が東大 6 号館で開催され, 江尻 (ロボット学会), 岡田 (OR 学会), 木下 (ロボット学会), 木村 (SICE), 鈴木 (OR 学会), 館 (日本 VR 学会), 出口 (SICE), 安岡 (リモセン学会), 眞溪 (SICE, 書記) が出席し, 規約修正や政策提言プログラムが採択された際の対応準備が討議され, 学会連合の名称を「横断型基幹科学 (技術) 研究団体連合」とし, その略称を「横幹連合」とすることを決定した [9]。略称「横幹連合」を提案したのは確か 館暉 (後に横幹連合副会長), であったと記憶している。名称に「技術」を入れるか否か定まらなかったのか, 議事録 [9] 上では括弧書きのみであるが, 7 月 16 日付の修正規約案では「横断型基幹科学技術研究団体連合」で統一された [10]。8 月に政策提言プログラムが採択され, 8 月 3 日に第二回設立準備委員会を開催し, 規約案を承認した。ここに漸く, 現在の名称「横断型基幹科学研究団体連合」(略称 横幹連合) が確定した。

5. 横断型基幹科学技術研究団体連合の設立

政策提言プログラムの調査研究活動が 9 月 9 日の第一回推進委員会を皮切りに, 4 つの WG, 6 つの分科会に分かれて, 学会連合に参集した各学会の協力を得て開始された。これと並行して, 別途採択された科学技術振興事業団の異分野交流推進事業「横断型基幹科学技術:

技術のもうひとつの基礎をもとめて」が 11 月 29 日~12 月 2 日の 4 日間にわたり, 大磯プリンスホテルで開催され「横断型基幹科学技術とは何か」について様々な立場から議論された。その一方で, 各学会において横幹連合への正式参加の組織決定が行われ, 11 月 25 日時点で 27 学会が正式参加を表明した。設立時の役員候補等についても各学会などから推薦を受け付けた。

このような準備を経て, 2003 年 4 月 7 日午後, 東大山上会館において, 30 学会を会員学会とする横幹連合設立総会を開催し, 会則, 事業計画, 予算案などを承認した。初代会長に吉川弘之 (当時, 産業技術総合研究所理事長), 初代副会長に木村英紀 (当時, 東京大学教授, SICE) と江尻正員 (当時, 日立製作所, ロボット学会) を選任し, また他の理事・監事を選出し, 正式に発足した。

参考文献

- [1] 第二回システム関連学会連合準備懇談会議事録, 9 月 28 日版, 2001.
- [2] 木下, 木村, 千原: 総合科学技術会議への提言 横断型研究開発推進の重要性について (原案), 9 月 30 日, 2001.
- [3] 12 学会提言: 横断型研究開発推進の重要性について, 12 月 26 日, 2001.
- [4] 日刊工業新聞: 横断型の研究推進を 12 学会総合科学技術会議に提言, 1 月 8 日, 2002.
- [5] 毎日新聞: 横断型研究 古い学术界を変える時だ, 2 月 10 日朝刊, 2002.
- [6] 第三回システム関連学会連合懇談会議事録, 3 月 8 日版, 2002.
- [7] 科学技術政策提言プログラム申請書「横断型科学技術の役割とその推進」, 4 月 5 日版, 2002.
- [8] 第 1 回横断型学会連合準備委員会議事録 (案), 5 月 31 日版, 2002.
- [9] 第 2 回横断型学会連合準備委員会 WG 議事録 (案), 7 月 12 日版, 2002.
- [10] 横断型基幹科学技術研究団体連合規約案, 7 月 16 日版, 2002.

鈴木 久敏



1948 年生。76 年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程経営工学専攻単位取得退学。93 年筑波大学社会工学系教授, 2001 年同ビジネス科学研究科長, 09 年同理事・副学長, 13 年同名誉教授, 現在横幹連合副会長。組合せ最適化, 経営科学, ビジネスゲームなどの研究に従事。工学博士。日本オペレーションズリサーチ学会, 日本経営工学会などの会員。